

《学界動向》

英米学界における「古代末期」研究の展開

南 雲 泰 輔

はじめに

2008年の春も終わりに近いころ、臙脂色の表紙にマクシミヌス・ダイアの発行になるフォリス貨を配した学術雑誌『古代末期雑誌』(*Journal of Late Antiquity*)の第1巻第1号が届いた。英語圏で初めての「古代末期」(Late Antiquity)研究の専門雑誌である。記念すべき創刊号の目次ページの裏側には、次のような献呈辞が付されていた。

『古代末期雑誌』の最初の一冊は、Peter R. L. Brown に捧げます。私たちの時代と私たちの学問領域の発展、拡大、振興、さらにはその創造に対する彼の尽力に感謝の意を表して。(The first issue of the *Journal of Late Antiquity* is dedicated to Peter R. L. Brown in appreciative recognition of the service he has done for the development, expansion, promotion, and even creation of our period and our discipline.)

「古代末期」なる研究分野が、ほかならぬ P. Brown (プリンストン大学)によって創り出され、発展拡大してきたものであることが——少なくとも『古代末期雑誌』編集長 R. Mathisen (イリノイ大学)を始め、S. Bradbury (スミス・カレッジ)や N. Lenski (コロラド大学)、C. Rapp (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)ら編集委員たちの共通理解がかかるものであることが——この献呈辞から瞭然と知られる。「発展」、「拡大」、「振興」、そして「創造」。この献呈辞の一字一句に、「古代末期」研究がいかに多くを Brown に負ってきたか、彼の果たした役割の大きさが深く刻み込まれているかのようである。

いうまでもなく昨今の西洋史学界のなかで、「古代末期」研究は、最も活発な議論がなされている分野のひとつであり、毎年多数の研究文献が陸続と刊行され、しかもそこで論じられるテーマは実に多彩である。その一端を垣間見ようとするなら、Brown が編集主幹を務めるカリフォルニア大学出版局の「古典古代の遺産の変容」(*The Transformation of the Classical Heritage*)シリーズのタイトル一覧¹⁾や、『古代末期雑誌』発刊の母体ともいえるべきアメリカ合衆国の専門学会、シフティング・フロンティアーズ (*Shifting Frontiers in Late*

Antiquity) の各大会の報告をまとめた論文集の目次を一瞥すれば足りよう²⁾。また、かかる研究成果の産出を可能ならしめる豊富な同時代史料についても、従来からの註釈書・近代語訳に加え³⁾、簡便な史料集や著述家に関する概説書などが続々と刊行されているほか⁴⁾、近年大量の『必携』を出版している英国・Blackwell社からは、実に100頁に及ぶ文献一覧を備えた「古代末期」のそれが出版された⁵⁾。個々の研究者の Variorum を含む論文集の類など、収集するだけでも著しい時間的・経済的困難を強いられるほどである。

かようにして「古代末期」研究は、近年英米学界を中心として大きな盛り上がりを見せているのであるが、にもかかわらず、例えば先の『古代末期雑誌』創刊号の冒頭三篇の論考が⁶⁾、「古代末期」概念の革新性を指摘するのみにとどまらず、その孕む問題点についても少なからぬページを割いて論じていることから窺知されるごとく、新しい研究分野としての「古代末期」が、当初のごとく賛辞ばかりによって迎えられることは難しくなっているのが現状のようである。かかることはとりもなおさず、熱に浮かされたごとき青年時代を過ぎて、いまや壮年期に入った「古代末期」研究が、自らの来し方行く末を冷静に考えるべきときに立ち到ったことを示すものとみるべきではなからうか。

本稿は、この英米学界を中心とする「古代末期」研究の現状と課題とについて考えようとするものである。我が国では今なお少なからぬ戸惑いとともに受け止められ、その学説としての展開も、Brownを中心に概略的にしか示されてこなかった「古代末期」研究であるが、本稿では、これまでに「古代末期」研究がたどってきた道程を詳しく跡づけるとともに、それが学説としていかなる点において画期的であり、逆にいかなる点が問題であるのか、現状における到達点を明晰にすべく努めたいと思う。すなわち、英米学界における「古代末期」研究の展開を追うことによって、「古代末期」概念の根幹を明らかにし、その有効性と限界とについて内在的な考究を行なうことが目的である。それは同時に、「古代末期」研究に対する我が国学界の漠然とした戸惑いを、幾許かでも解消することにつながるのではないかとと思われる。

執筆に先立ち、筆者は第58回日本西洋史学会大会の小シンポジウム「西洋古代史における『衰退』の問題」(2008年5月11日、島根大学)について意見を求められた。それはフォーラム「ローマ帝国の『衰亡』とは何か」(南川高志編、『西洋史学』234, 2009年)の一部として、本稿とほぼ時を同じくして公刊されるであろう。本稿は、この寸稿⁷⁾において論及できなかった内容を拡充した、いわば続編である。このフォーラムは、ローマ帝国の「衰亡」をめぐる近年の動向を大きく取り上げたもので、ローマ史(井上文則氏)・西欧初期中世史(加納修氏)・ビザンツ史(大月康弘氏)の各々の立場から重要な問題提起がなされているが、その主題はあくまでも「ローマ帝国の『衰亡』」理解如何であって、「古代末期」研究そのものに焦点が合わせられていたわけではなかった。それゆえ、本稿の考察は、この点を補うものとなるであろう。なお、このフォーラムと本稿とは、行論の必要から一部内容の重複する箇所、また理解の異なる箇所もあろうが、合わせてご参照いただきたい。

第1章 「古代末期」研究の誕生と成長—— 1971年から1997年まで——

「古代末期」研究とは、いかなる研究分野であるかを知るためには、何はともあれ、それを「創造」したとされる P. Brown が 1971 年に出版した『古代末期の世界』の序文を参照するのが捷徑であろう。冒頭、Brown は次のごとくに述べている。

本書は、社会的・文化的変化に関する研究である。私は読者の皆さんに、次のような問題について、いくらかでも考えていただければと願っている。すなわち、どのように、そしてなぜ、古代末期の世界（これは概ね西暦 200 年から 700 年頃までの期間であるが）が、「古典的な」文明から異なったものとなったのか、そして次に、この時代の急激な変化が、どのようにして西欧の、東欧の、さらには中東の様々な発展を規定したのか。

かかる時代を研究するためには、著しく古代的で、しかも〔かかる古代的なものが〕深く根を下ろした地中海を取り巻く世界の変化と継続との間の緊張について、常に自覚的であらねばならない〔後略⁸⁾〕。

この序文から、「古代末期」研究の特徴として直ちに以下の諸点が明らかとなる。すなわち、「古代末期」研究は、社会史的・文化史的性格を持つこと。時代的には、3世紀から8世紀を対象とすること。かかる時代は「古典古代」とは異なった時代であること。また、かかる時代は、古代的なものの継続とその変化との間の緊張関係の文脈において理解されるべきこと。これに続く序文全体からはさらに、「古代末期」は、「衰退と滅亡」というメランコリックな時代としてではなく、新たな始まりの時期として捉えられるべきこと、地理的には西欧のみならずペルシア、果てはイランまでをも含むこと、かかる地理的範囲のなかで生じた変化は、「異教」とキリスト教の関係も含め、複雑かつ多様であったこと、特に地中海東部とメソポタミアがかかる変化の主要な舞台であったこと、そして、かかる時代の社会における革命的变化と精神におけるそれとの間には否定し難い密接な関係があり、それは因果関係の論理によっては捉えきれないこと、などを析出できるのである。

特に重要なのは、第一に、宗教をも視野に含めたその社会史的・文化史的性格であり、第二に、「衰亡」よりも継続性と変化に着目するその視点であり、第三に、地中海東部を中心に時代的・地理的に広汎な対象を設定している点である。以上の三点は、以後の「古代末期」研究の基本的な立脚点となる考え方といってよいが、このように時間的にも地理的にも広大な世界において生じた複雑な現実と変容とを、その強靱な頭脳によって総合し、「古代末期」なるひとつの時代像としてまとめ上げたところに Brown の画期性があったということが出来るわけである。

かかる立場を Brown が明瞭に打ち出したことで、従来の政治史・事件史によっては扱われてこなかった「古代末期」の諸側面に対して我々の蒙が啓かれ、E. Gibbon や M. Rostovtzeff の「衰亡」「没落」⁹⁾ や E. Dodds の「不安」¹⁰⁾ といった言辞を前に萎縮することなく、当該時代について「後ろ向きというよりはむしろ前向き」¹¹⁾ に論じることが可能となった。また、『古代末期の世界』に先立って執筆され、同じ 1971 年に『ローマ研究雑誌』に発表された「古代末期における聖なる者の台頭と機能」¹²⁾ や、のちに彼が公にする一連の研究から窺知されるごとく¹³⁾、Brown の関心の中心には「古代末期」におけるキリスト教理解如何が存することは明らかであるが、その際に先述のごとき立場を採ることによって、伝統的に「教会史家」と「世俗史家」の間を隔てていた障害を打破せんとしたことも大きな功績といえよう¹⁴⁾。特に、分析手法として社会学や人類学、精神分析学を取り入れた論文「台頭と機能」は、後学に絶大な影響を及ぼし、のちに「パラダイム転換をもたらした」論文と評されることになる¹⁵⁾。

かくして Brown が提示する「古代末期」は、一種固有の意味合いを帯びた研究分野として立ち現れてくる。しかしながら、それが研究分野として人口に膾炙しかつ拡大してゆくためには、Brown ただひとりの努力のみならず、彼の「古代末期」理解に対する強力な賛同者の存在が与って力があつた事実が看過されてはならない。すなわち、Brown とほぼ同世代の G.W. Bowersock と Averil Cameron の二人がそれである。「古代末期」の論者を称する研究者は、やがて急速にその数を増してゆくが、学問分野としての形成と発展に枢要な役割を果たしたのが、この Brown、Bowersock、Cameron の三人であることは、その後の展開に徴してみても、まず疑われないうところであろう。Brown の業績については我が国でも夙に紹介されてきているので¹⁶⁾、以下では、Bowersock と Cameron の業績について紹介したのち、「古代末期」研究の展開が、ひとまず総括されることになる 1997 年までを概観することにしよう。

まず Brown の一歳年下の G.W. Bowersock であるが、彼ははじめハーヴァード大学で教え、1980 年以降はプリンストン高等研究所 (Institute for Advances Study) に移って、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国における古代史研究の発展に多大な貢献をなしてきた研究者であり、ハーヴァード大学出版局の「古代を暴く」(Revealing Antiquity) シリーズの編集主幹を務めている。我が国では、「第二次ソフィスト運動」に関する業績がしばしば引用され¹⁷⁾、また「背教者」ユリアヌスを扱った著作の翻訳もなされているが¹⁸⁾、その研究対象は幅広くギリシア史・ローマ史・近東史に及び、文献史料への独特なアプローチに加えて、貨幣やモザイク画などを含む考古資料を縦横に活用する考察手法に特色がある。広く研究対象を求めるとはいえ、彼の関心の中心には常に「ギリシア」があり、特に『古代末期におけるヘレニズム』(1990 年) は、「古代末期」のキリスト教世界におけるヘレニズム (ギリシア文化) の継続性を論じた重要な業績で、1992 年にアメリカ歴史協会 (American Historical Association) からブレストッド賞 (James Henry Breasted Prize) を授与されている¹⁹⁾。

もう一人の Av. Cameron は、6世紀のビザンツ作家アガティアスに関する論文をもってビザンツ史家としての経歴をスタートした女流研究者で、ロンドン大学キングズ・コレッジを経てオクスフォード大学に移り、現在は同大学キープル・コレッジの学寮長を務め、またデイムに叙されている。その活動の場は Bowersock と同様多岐にわたるけれども、6世紀の著作家プロコピオスに関する研究や4世紀の教会史家エウセビオスの『コンスタンティヌスの生涯』の註釈書にみられるごとく²⁰⁾、歴史叙述や修辭的な史料の扱いに長けた研究者であって、ローマ帝国のキリスト教化のなかで教会のレトリックが果たした役割如何を分析した『キリスト教と帝国のレトリック』(1991年)は、彼女の史料に対する批判能力が遺憾なく発揮された代表作である²¹⁾。

この二人によって次々と発表された業績が、Brown のそれとともに現在の「古代末期」研究の直接的な基礎となっていることは間違いない。彼らにおいては、「古代末期」研究の継続性重視の立場が強く打ち出されていたほか、あえて単純化を試みるならば、Bowersock の研究によっては、地理的に広く対象を設定しつつも、主として地中海世界東部を考察の中心とする傾向が、また Cameron の研究によっては、そのキリスト教をも視野に含めた社会史的・文化史的性格が、各々一層強められる結果となったといつてよいであろう。また、Bowersock が当時教鞭を執っていたハーヴァード大学で、Brown の『古代末期の形成』の基となる講演が行なわれたこと(1976年)も記憶に留むべき事柄といえよう²²⁾。

しかし、「古代末期」研究にとって個々の研究成果以上に大きな意味を持ったのは、1980年代から1990年代にかけて、「古代末期」が、いわゆる「ローマ帝国衰亡論」に取って代わるべき可能性を秘めた新しい概念であるということが、Bowersock と Cameron らを主たる論者として、強力に主張されるようになったことである。既に Brown は、先の『古代末期の形成』(1978年刊)において、「メロドラマ」「アナクロニズム」といった言辭で「衰亡論」を辛辣に批判していたが²³⁾、かかる「衰亡論」批判と「古代末期」概念の有効性の強調という路線が、この時期に明確に定められたのである。

早くも1980年に、Cameron は、フランスのビザンツ史家 E. Patlagean の『ビザンツにおける経済的貧困と社会的貧困』(1977年)²⁴⁾を手掛かりとして、「全体史」との関連から「古代末期」概念の有効性如何を探り²⁵⁾、また Cameron が参加した論文集『古代末期における伝統と革新』の編者 F. Clover と R. Humphreys は、巻頭の「古代末期を定義するために」(1989年)²⁶⁾において、「古代末期」概念を、A. Riegl²⁷⁾や H. Pirenne²⁸⁾らの学説と関連づけるとともに、ローマ帝国が劇的に変容した400年から700年という期間は、「ローマの運命」という観点に立つ限りにおいて「古代末期」として理解しうるが、さらなる適切な定義のためにはイスラムについても勘案する必要があると述べている。しかしながら、その重要性に反して、「古代末期」概念の内実そのものに関する議論は以後も余り深められることなく、むしろ力点は「衰亡論」批判に移った。

すなわち、Bowersock は、論文集『古代の国家と文明の崩壊』に寄せた論考「ローマ帝国の

解体」(1988年)²⁹⁾において、「古代末期」の世界は衰退する世界ではなく、移行 (transition) の世界であり、そこでは、それ以前から存在した枠組みのなかで社会的・政治的・知的再編成が成し遂げられ、物理的・精神的な境界は変化し再定義され、中心は移動した。かかる事態を正しく表現する言葉は、変容 (transformation) であり再編 (reformation) であり再配置 (relocation) であって、ローマ帝国の没落なる考え方は、最も皮相的な意味においてのみ可能なのだ、と主張した。さらに Bowersock は、「ローマの没落という消滅するパラダイム」(1996年)³⁰⁾という挑発的なタイトルの論文を公刊し、古代史家・中世史家としての自覚ある者は「ローマの没落」などもはや語ろうとは欲しない、それは今や無用の長物であり、パピルス文書の色褪せた文字よろしく、もはや我々に語りかけることなどないのだと断じたのである。また、Cameron の方も、1993年に当該時代に関する二冊の通史を公にし、ローマ帝国の「没落」(fall) は、ヨーロッパ・地中海世界のかたちを変えた唯一かつドラマティックな出来事などではなかったと述べ、かつ、「古代末期」という用語こそが重要であり、この用語によって地理的にも時代的にもより広い観点に導かれるのだと、「衰亡」に代わる概念としての「古代末期」の有効性を強調している³¹⁾。これらの批判が、彼らの英米学界における指導的な地位とも相俟って、Gibbon 以来 200 年以上にわたり当該時代の理解を頑強に規定し続けてきた「衰亡論」に対して、「古代末期」概念が最終的な引導を渡したかのごとき強烈な印象を与えるものであったことは間違いあるまい³²⁾。

さて、Bowersock による一種の「死亡宣告」の翌年 (1997年)、ノルウェーの古典学専門誌 *Symbolae Osloenses* において Brown の『古代末期の世界』刊行 25 周年を記念する特集「『古代末期の世界』再訪」が組まれた³³⁾。Brown が自著成立の背景を回顧するとともに、Bowersock と Cameron を筆頭に 10 名の研究者がコメントを寄せ、それに対して Brown が反応するというこの特集は、1971 年以後の「古代末期」研究に対する Brown 自身の理解と反省とを窺わせて興味深い。

Brown は、ダブリン王立協会の図書館で Rostovtzeff の『ローマ帝国社会経済史』が描いたメランコリックな記述に触れ、オクスフォードで中近世史を学ぼうと決意した若き日の思い出から書き起こし、自身が生まれたアイルランドの宗教の歴史や、大英帝国下のエジプトやスーダンで鉄道技師として働いた父の蔵書の影響などから、やがて宗教と「エキゾチックなもの」(非ヨーロッパ的なもの——非古典古代的なものという含みもある——) に対して強く関心を掻き立てられた、と述べる。続いて、その後の学究生活のなかでは、H.-I. Marrou と A. Piganiol からは「デカダンス」の観念や当時の帝国の「弾性」について、また S. Mazzarino や A.H.M. Jones からは帝国社会に関する基礎的な理解について、E. Dodds や A. Festugière からは 3 世紀の宗教状態に関する理解について、また W. Frend からは (意見を異にはするけれども) ドナティスト運動の理解について、各々影響を受けたことを記し、これらの研究者たちによる社会史・文化史に関する業績によって、1960 年代には、後期ローマ帝国は、Gibbon や Rostovtzeff らの名前とともに想起される「衰亡」「破局」のメランコ

リックな歴史以上のものであると考えられるようになってきていた、と述べる。

やがて1967年に『アウグスティヌス伝』を公刊したのちには、H. Pirenneの学説に加え、F. Braudelの『地中海』³⁴⁾からは、気候や環境、生活様式などの重要性に気づかされた、という。それは『古代末期の世界』に対して座標軸を提供するものであったし、また英国の社会人類学者M. Douglasとの交流からは人類学的な考察手法を学ぶなどして、古代末期の「異教」の変容とキリスト教の興隆という巨大かつ決定的な変化について、不安や声高な価値判断を差し挟むことなく執筆することが可能となった、とBrownは述べる。1971年当時において極めて画期的な書物として世に出た『古代末期の世界』は、こうして生まれたわけである。そして、かかる思索の過程のなかで、自らが「宗教史家」(a historian of religion)であることを初めて自覚したというBrownの発言も、「古代末期」研究の主要な性格を象徴するものとして重要であろう。

かく回顧したのち、Brownは、四半世紀を経た『古代末期の世界』に対する反省として、以下の三点を挙げる。第一、考察の地平を広く設定しているにも関わらず、地理的には狭い範囲にしか焦点を当てていなかったこと。第二、1960年代後半の時点で自らの頭のなかにあった「古代末期」概念には、ローマ帝国の存在が含まれていなかったこと。既に後期ローマ帝国が「全体主義的な怪物国家」であるなどという重要な歴史的誤解は解決されたという感覚があったために、1970年代から80年代の研究では、帝国の構造にはあまり言及せず、宗教と社会の歴史を追うばかりであったが、『古代末期における権力と説得』(1992年)³⁵⁾の執筆を始めるに際して、これが間違いであったことに気づいた、という。「古代末期」の決定的な特徴は、ローマ帝国滅亡後にも引き続き存続したローマ風の生活様式の包括性にあると考えていたが、それは、社会生活は政治的枠組みとは相対的に独立しているというPirenneのごとき考え方に基づく誤解だった、と³⁶⁾。そして第三に、かつて熱意を持って採用していた社会流動というモデルは、それに与えた重要性に比して、後期ローマ社会の構造についてあまりに浅薄かつ単純な理解であったこと。かかるモデルをBrownが採用した理由は、彼が当時「道具主義的な」(instrumentalized)観点を信じて疑わず、M. Foucaultのいう「自己のテクノロジー」が現在のように広汎な関心と呼ぶことを予想していなかったからであり³⁷⁾、また、『古代末期の世界』においては、都市と農村、エリートと大衆、古典的と非古典的といったごとき二項対立がなお用いられていた。

かかるBrownの反省には、やや理解が難しい点も含まれているが、少なくとも、1971年以後の四半世紀における「古代末期」研究の発展、とりわけ「古代末期に関する宗教研究の、ダムが決壊するかのごとき激増³⁸⁾」が、Brownをしてかく反省せしめるに足るほどのものであったことは確かであろう。このことは、1993年に創刊された『初期キリスト教雑誌』第6号(1998年)に組まれた「台頭と機能」刊行25周年記念の特集のなかの、次のようなBrownの発言に端的に示されている。すなわち、「古代末期に関する研究において、この四半世紀は我々を新しい時代へと運んでくれた。そのことは特に、この機会に〔『初期キ

リスト教雑誌』の特集を指す] 集まってくれた方々の努力の賜物である。彼らの仕事と友情とは、1970年には夢想だにしなかった古代末期の眺望へと、私の注意を常に導いてくれている」³⁹⁾。

さて、話を *Symbolae Osloenses* の特集に戻し、Brown の反省に続いて述べられる 10 名のコメントについてみてみよう。そこで提起された論点は多岐にわたるため全てを取り上げることはできないが、Brown の反応とも照らし合わせ、本稿の課題である「古代末期」研究全体の理解にとって重要と判断されるのは、第一に、Brown がオクスフォード大学において学んだのが「近代史」であり、「古代史」ではなかったこと、第二に、Brown が強く批判する「衰亡」の問題は、例えばドイツ歴史学界ではさほど大きく取り上げられている問題ではなく、その意味において『古代末期の世界』は特殊イギリス的な書物であること、しかしながら F. Millar や R. MacMullen, T. Barnes のように、英米の研究者であっても、Brown とは異なるスタンスで研究している歴史家もいると指摘されたことである。この二点から、Brown の特徴的な観点は、古代史家ではなく中世史家として出発したことに由来すること、そして「古代末期」研究は、英米学界において特殊な状況として生じたものであること、しかし、必ずしも英米学界全体を覆うものではないこと、が確認されるのである。この二点については、のちに第 3 章で触れることになろう。

この *Symbolae Osloenses* や『初期キリスト教雑誌』の特集以後の「古代末期」研究の動向は、刊行物の増加とともに、口頭報告を基にした論考が含まれるため執筆時期と刊行時期が前後することがあり、論者たちの見解の推移も、単に出版物の刊行年に沿って時系列に配置しただけでは追いつらなくなる。しかし、重要なことは、『古代末期の世界』刊行から 25 年を経て、「古代末期」研究に対する批判が公然と投げ掛けられるようになったということであり、同時に「古代末期」研究の側でも、自らの研究分野としての独自性を一層明確にすべく、自覚的な努力を行なうようになったということである。かかる動向の展開は、特に Av. Cameron と J.H.W.G. Liebeschuetz の間の論争というかたちを取って表面化してくる。

第 2 章 「古代末期」研究の成熟と「ローマ帝国衰亡論」

—— Av. Cameron と J.H.W.G. Liebeschuetz の間の論争を中心に ——

まず、*Symbolae Osloenses* の特集の直後、そこでの Brown の回顧と反省とを受けたものであるのか否かは判然としないが、ともかくも「古代末期」研究の論者自身によって、Brownのごとく個人的な感懐からは離れ、より広い視野のなかで学説の特徴と成立の思想的背景に注意が促されたことが特筆に値しよう。

すなわち、Av. Cameron が 1998 年に公にした論文「危機という理解」がそれである⁴⁰⁾。この論文のなかで Cameron は、いまや「危機」(crisis) や「衰退と没落」(decline & fall) といったとき言葉は適切なものではなく、現在ではそれらに代わって「変化」(change) や

「変容」(transformation), また「同化」(assimilation) や「文化変容」(acculturation) といった言葉が用いられるようになっており, それはそれらが相対的に価値判断から自由であるからだと述べる。中央集権的な権力はもはや我々の嗜好に合わず, 帝国や政治組織への信頼は失われ, グランド・セオリーもかつてのごとき優位を剥奪された現代において, 帝国の「没落」などという劇的な政治的变化を問題として設定することはもはや適切ではない, と。

そして Cameron は, かかる状況が生まれた背景には, 現代の歴史的思考に甚大な影響を与えている 20 世紀後半の「文化多元主義」(cultural pluralism) があると指摘する。この文化多元主義の下では, 伝統的な歴史学の「カノン」の外にある地域 (イエメン, アクスム, ヌビアなど) とトピック (女性史, レトリック, コミュニケーションなど) とが研究対象となる。また, 考古学の発展は「古代末期」の都市の変容の理解に重要であったが, その都市でさえも, もはや行政単位としてのみ研究されるのではなくなった。近時様々な歴史家たちによって書かれる新しい歴史は, 確実なこと (the certain) ではなく, 蓋然性 (the probable) や可能性 (the possible) の観点から表現されている。さらに, 地理的・時代的な指標 (markers) が解体されるとともに, 近年の研究は, 研究者自身の変化の契機を探るようになった。つまり, どの時代も, 自らのやり方でもって過去を想起し, かつ創り上げるのであって, 35 年前と現在とでは理解が違うのは道理だ, と。しかしながら, かく述べるなかで Cameron が, 「ことによると私たちは, やりすぎているのかも知れない」と若干の不安を吐露したことは, まさにこの 1997 年の直後から, 「古代末期」研究に対する公然たる批判が始まったことと決して無関係ではなかったのではないかと推測される。

すなわち, 1997 年から 1999 年にかけて, ノッティンガム, パーミンガム, オクスフォードでは, 考古学者 L. Lavan を中心として「古代末期」の都市化に関する一連のカンファレンスが行なわれていた。その報告書は 2001 年になって刊行されたが, そのなかで後期ローマ史家 J.H.W.G. Liebeschuetz が, 「後期ローマ史における『衰退』概念の利用と乱用」と題する論文を公にし, 「衰退」概念を忌避する Brown, Bowersock, Cameron の三者の見解を批判し, 「衰退」概念擁護の旗幟を鮮明にしたことが重要であった⁴¹⁾。後期ローマ帝国史研究の大家 A.H.M. Jones の学風を受け継ぐ Liebeschuetz は⁴²⁾, 「歴史は『衰退』の概念なしではやっていけないのだ」と述べて近年の「衰退」概念排除の傾向を憂慮し, 同時に「衰退」ではなく「変化」「変容」を好む近年の動向は, それがいかなる知的雰囲気の下で醸成されたものであるか, 自覚的であるべきだと述べたのである。

かかる Liebeschuetz の批判に対しては, 批判された当の Cameron を始めとして, ローマ考古学の B. Ward-Perkins やビザンツ史の M. Whittow, また L. Lavan らが賛否両論のコメントを寄せている。Cameron は, 「衰退」なる言葉は価値判断から自由ではありえず, 有用というにはあまりにも感情的な言葉だと強く反論したが, Ward-Perkins や Whittow らは, Liebeschuetz の「古代末期」批判に部分的にはあれ賛意を表明した。

先の Cameron の論文とともに, この Liebeschuetz の批判とそれに同調する学者たちの存

在が明らかになったことが、現在に到る「古代末期」研究評価の流動化の嚆矢となったと考えてよいであろう。確かに「古代末期」研究は、1995年には学会「シフティング・フロンティアーズ」を発足させ、新しい学問分野として順調な発展を示していたかにみえた。しかしながら、如上の Liebeschuetz らの批判は、「古代末期」研究が、英米学界においてさえ全面的な賛同を得ているわけではないことを如実に示すものであって、それは「古代末期」の論者たちに対して少なからぬ衝撃を与えたものと推測されるのである。このことは、「古代末期」研究は特殊イギリス的だという *Symbolae Osloenses* の特集で指摘された点とも合わせ、Brown や Bowersock らに、「古代末期」研究とはいかなる学問分野であるかを、一層明瞭かつ広汎に示す必要があると痛感させたのではないであろうか。

もっとも、このあたりの事情には、刊行物の字面のみからでは必ずしも詳らかにしえない部分も多いはずであるが、かかる批判が提起されたのちの1999年、Brown らがイスラム美術・建築史を専門とする O. Grabar の協力を得て、『古代末期——ポスト古典期の世界への手引き』⁴³⁾ なる大部の事典的書物を刊行したことは、如上の動向に照らすならば、提起された批判を受けての、「古代末期」概念の再規定という動きのなかで理解されねばならないことのように思われるのである。それは何よりも、この書物の序文において、「古代末期」研究とは「250年から800年頃の時代を、それ自体独自の価値を持ち、他とは区別され、かつ極めて決定的な歴史の一時代として扱う」ものであるとの「定義」が、初めて明瞭に打ち出された事実から窺知されるごとくである。従ってこの『手引き』は、客観的には「古代末期」研究が30年近くにわたって蓄積してきた成果の到達点といってよく、その刊行は研究史上におけるひとつの画期として記憶されてしかるべきであろう。

また、刊行年は若干前後するが、『ケンブリッジ古代史 新版に、『帝国の危機：193-337年』（12巻、2005年）のほか、旧版には含まれなかったコンスタンティヌス1世以後の時代を扱う『後期帝国：337-425年』（13巻、1998年）及び『古代末期 帝国とその後継者たち：425-600年』（14巻、2000年）の2冊が追加され、これらのいずれについても Cameron が編者として関わったことは⁴⁴⁾、その概説書としての揺らがぬ地位とも相俟って、「古代末期」概念の確立と普及とに大きな役割を果たすものであったことは想像に難くない。

しかしながら、こうした「古代末期」研究の成熟は、英米学界以外の研究者たちにとっても看過しえない研究動向として映るようになった。例えば、先の『手引き』と同じ1999年、新マルクス主義の影響を受けたイタリアの歴史家 A. Giardina⁴⁵⁾ は、「古代末期の爆発」⁴⁶⁾ なる論考において、Brown, Bowersock, Cameron ら三者の見解を取り上げ、彼らのいうところの「古代末期」なるものが、概して現代的な先入見の下で構築された概念であることを指摘し、さらに、文化と宗教を中軸として学際的性格を持つ「古代末期」研究が、さしたる批判もないまま「爆発」(esplosione) 的に拡大するに伴い、古代を越えて初期中世の領域にまで入り込んで、従来の時代区分 (periodizzazione) を破壊していると批判して、英米学界を中心とする「古代末期」研究に対して強い懸念を表明している⁴⁷⁾。

さて、如上の「古代末期」研究の発展と、英米学界以外からの批判の提起を踏まえ、先の Liebeschuetz は、今度は「衰退」概念の擁護にとどまらず、「古代末期」研究の性格そのものに対する批判を行なうに到った。Cameron の「危機という理解」に対する反論ともいべき、「古代末期と『衰亡』の拒絶」（2001 年）なる論考がそれである。この論考は、のち 2003 年に「古代末期、『衰亡』の拒絶、多文化主義」として一部改稿されるが⁴⁸⁾、そのなかで彼は、近時の動向の包括的な調査ではないと断りつつも、1970 年代以降の研究が「古代末期」を発見したというのは誤りで、それは既に A. Riegl らによって発見されているとし、英米の研究者を中心とする「古代末期」研究の文化史・継続性重視の姿勢、その背景にある多文化主義、また強迫観念的なまでの「衰亡」概念の拒絶を改めて批判した。そして彼は、「古代末期」研究という「新しいモデル」には、革新を尊び伝統を軽んずる知的雰囲気の影響が見出されて興味深いけれども、かかる姿勢は同時に極めて破壊的でもありうるとして警鐘を鳴らしたのである。

かような Liebeschuetz の批判に対して、Cameron は「『長い』古代末期」（2002 年）⁴⁹⁾と題する論文を発表し、いかにして、そしてなぜ、「古代末期」研究が現在において強い影響を持つようになったのか、またそれは将来の研究にとっていかなることを含意するのかを丁寧に論じている。それは前稿「危機という理解」とともに、「古代末期」研究成立の背景を 20 世紀後半の思潮のなかに探ろうとした優れた考察であって、Liebeschuetz の批判によく応える分析を含み、学問分野としての「古代末期」研究を理解するために重要な一篇である。前稿と重複する部分もあるが、やや詳しく内容を追ってみたい。

Cameron によれば、英語圏において当該時代の研究に新しい展開をもたらしたのは A.H.M. Jones による『後期ローマ帝国』（1964 年）⁵⁰⁾の出版であったが、新しい方向性を定め、かつ「古代末期」という言葉を広めたのは、やはり P. Brown の『古代末期の世界』であり、彼による「古典古代の遺産の変容」シリーズの刊行やカリフォルニア大学バークレー校やプリンストン大学での教育活動を通じて、「古代末期」の概念は極めて強力なモデルとなっていったと述べる。無論、S. Mazzarino や H.-I. Marrou のごとき先駆者はいたけれども、1970 年代に Brown が上げた業績が、文化史への関心の転換を惹起したことは疑いなく、「長い古代末期」（long late antiquity）なる概念を打ち立てるに際し強い影響力があったという。そして Cameron は、Bowersock が「消滅するパラダイム」と述べたごとく、かつて一大事件として扱われた「ローマの没落」への興味が現在では失われ、多少とも継続的な文化史へと関心が移ったことが、近年の英米学界における最も顕著な特徴のひとつであり、かかる「古代末期」研究の立場は、20 世紀後半に特有の時代理解のモデルだと述べる。

では、この 20 世紀後半に特有のモデルとしての「古代末期」は、いかにして生まれ、いかなる性格を備えているのであろうか。まず Cameron は、20 世紀後半に、ヨーロッパとその遺産を構成しているものは何かを説明する必要性が改めて認識され、かかる認識が「古代末期」におけるエスニシティとアイデンティティの問題に反映されているとする。その結

果、近年では「同化」「文化変容」といった問題に注意が向けられるようになった。この傾向は多文化主義的な観点 (multicultural view) に由来する、というのが前稿以来の Cameron の理解であり、それは Liebeschuetz も認めるところであるが、その背景には、東欧における共産主義の終焉 (なかならず 1989 年のソ連崩壊) が、ヨーロッパそのものについての定義と、その将来に関する議論を刺激したこと、また 1978 年に E. Said が『オリエンタリズム』⁵¹⁾ を公刊し、コロニアル・ポストコロニアルな言説が用いた戦略と技法とに対し広く自覚を促したことがあるという。特に Said の思想は、ビザンツ学と「古代末期」研究に対する否定的評価がその基礎を置くところの「西欧中心主義的」「啓蒙主義的」な観点、またそれらを古典古代と比較して低くみる観点などの見直しにも適用しうる考え方であり、従って現在の「古代末期」研究の論者たちが「古代末期」という言葉を用いるのは、かかる従来のごとき価値判断を覆し、旧弊な古典学者たちによって打ち立てられた文化帝国主義 (cultural imperialism) の障壁を打破せんと試みなのだと述べる。

すなわち、「古代末期」概念は、20 世紀後半の相対主義的で、価値判断を避けるという知的雰囲気の中で醸成され、寛大で多文化主義的な姿勢を持つものであって、「古典古代」「中世」「ビザンツ」を峻別し、道徳的・審美的価値判断を振りかざす独断的な旧説とは相容れぬものであり、かく固有の意味において用いられる「古代末期」概念を、Cameron は躊躇いなく「ブラウン的な 20 世紀後半に特有の観点」(the Brownian late-twentieth-century view) と呼ぶ。現在の「古代末期」概念が Brown によるものであることを明言したわけである。

そして Cameron は、なぜかかる固有の意味における「古代末期」概念が広汎な支持を受けているのかという問いに対し、以下の諸点を回答として挙げる。第一に、相対的にみてまだ調査の及んでいない史資料、特にキリスト教に関する史料 (聖人伝、釈義書、説教、書簡) が豊富であること。伝記史料や法律史料も豊富に残存し、考古学的資料や視覚芸術も考察の対象となりうる。とりわけ考古学的資料は、「古代末期」の都市の変容の問題を議論するための重要な素材である。第二に、学問領域間の垣根を超える多様な視角を取りうること、特に若手研究者には文化史的・思想史的な観点からのアプローチが多い。第三に、テクノロジーと問題設定の障壁が打破されたこと、従って、身体・ジェンダー・禁欲主義・権力など多様なトピックが問題となりうること。第四に、古典学者たちが初期キリスト教史に取り組むようになったこと。19 世紀以来、伝統的に英米学界では古典学と新約学・教会史・教父学とは別々の学問分野として存したが、現在では社会人類学・社会学・文学理論などがキリスト教史研究に応用されるようになり、特に近年ではジェンダーの観点からの研究が増えている。しかも、キリスト教そのものというよりは、むしろ宗教という括りのなかで研究が行なわれるようになり、キリスト教を研究するからといってクリスチャンである必要はなくなった。「古代末期」研究において宗教の問題が重要な位置を占めているのは、かつてのごとくキリスト教への改宗やキリスト教化を問題としたいからではなく、宗教が文化の担い手であって、また宗教的史料が考察に際して豊富な素材を提供してくれるからなのだという。

では、この「古代末期なるブラウン的モデル」(the Brownian model of late antiquity)の今後についてはどうであろうか。Cameron は、かかる時代理解のモデルに対しては種々の批判もあろうが、歴史というものは、それが生み出される知的・教育的文脈に依存するものだ、という。確かに「長い古代末期」なる理解は、文化史を重視し、また特殊英米的な(特に北米で顕著な)現象であり、同時代の世界に対する楽観主義があり、「言語論的転回」ともよく共鳴し合い、従って、かかる理解は、征服や侵略といったごとき考え方とは相容れない。制度史や政治史の復興もあるだろうけれども、さしあたってのところ、現在の「古代末期」研究の隆盛は、旧来の問題関心にとって代わる新たなそれを提示し、また古典古代・中世世界についての伝統的な理解を突き崩しているのであって、かかる研究の発展は長く残ることになるだろう、と Cameron は述べている。

如上の Cameron の説明は、「古代末期」研究の性格を明らかにしたものとして貴重であるが、かかる Cameron の自己理解を逆手に取って Liebeschuetz は、2004年に再度「古代末期」研究に対する批判を書いた。「古代末期の誕生」⁵²⁾と題する論考がそれで、「古代末期」研究の創始者は Brown ではない、というのが彼の主張の眼目である。すなわち、既に20世紀初頭には、美術史の A. Riegl、宗教史の R. Rhenzenstein、「予言者」O. Spengler⁵³⁾らによって、当該時代は独自の価値を持つ時代として捉えられていたのであり、またフランスの H.-I. Marrou も、独自の研究に基づき「テオポリス(神の国)の時代」との呼称を提案していた⁵⁴⁾。つまり、仮にかかる Liebeschuetz の指摘を受け入れるならば、Cameron が強調していたごとく、20世紀後半の思想状況を背景とせずとも、20世紀初頭以来、既に独自の時代としての「古代末期」は存在していたことになるわけであり、Brown のいう「古代末期」に特段の意義を認めることはできなくなってしまうわけである。

但し、Liebeschuetz 自身、Brown の登場によって「古代末期」研究にひとつの画期が訪れたことについては否定していない。また、Cameron は、自らの経歴の回顧をも含む論考「歴史と歴史家の個性」(2004年)⁵⁵⁾において、「古代末期」という言葉そのものは Brown 以前から存したことを認めつつも、それが人口に膾炙するようになるのは Brown 以後であることを重ねて指摘している。いずれにしても、現在の学界で論議の対象となっている「古代末期」研究が、その言葉の初出年代は別として、1970年代以降に活発となった固有の学問領域を指すものであることは、兩人ともに同意するところとみて間違いあるまい。

さて、ひとまずここで以上の Cameron と Liebeschuetz の間の論争を、次のごとく総括しておきたい。すなわち、この論争は、1997年の Brown の回顧のごとく自身の個人的経験からというのではなく、「古代末期」が四半世紀を経て成熟過程に入ったことを背景に、より広い時代的・思想的脈絡のなかで、その成立と発展とが捉え直され、また「古代末期」概念の特徴及びそれに対応する問題点が各々明らかにされ、「古代末期」概念の有効性如何が広く議論の対象とされたという点で、大きな意義を持つものであった⁵⁶⁾。

特に Jones 以来の伝統的な立場に立つ論者からの批判として、「古代末期」研究の「衰亡」

概念の拒絶のみならず、その政治行政史の軽視が取り上げられたことは重要であり、それはのちに、かかる新旧の立場の統合への試みにつながってゆく。「古代末期」研究とは異なるスタンスを取っているとされたローマ史家 F. Millar が、近著『ギリシアのローマ帝国』（2006年）において、「A.H.M. Jones による政治行政史と P. Brown や Av. Cameron らによる文化史との間の架け橋」たろうと試みていることなどは、その一例である⁵⁷⁾。他方で、「古代末期」研究が「衰亡」概念を拒否したことに対し、多くは一般書としてではあるが批判が提起され、「衰亡論」再燃の様相を呈している⁵⁸⁾。かかる状況のなかで現在の「古代末期」研究は、自らの固有のスタンスを意識しつつも、必ずしもそれに固執することなく、個別の実証的成果を累々と蓄積している⁵⁹⁾。また、「古代末期」研究の学説史的な位置づけを明らかにしようとする最近の論考においては、「古代末期」研究を、全く独自で新しい学問分野として孤立させるのではなく、欧米の学問的伝統全体との関連を考慮に入れた上で、より長期的な観点から把握せんとする試みがなされるようになってきている。例えば、『古代末期雑誌』創刊号（2008年）の A. Marcone や E. James のそれ、『古代末期必携』（2009年）収録の S. Rebenich のそれなどがそうである⁶⁰⁾。これらの学説史的研究によって、「古代末期」研究は批判的検証に付され、学説としてより相対的に捉えられるようになったとみてよい。

かくして、「変化」「変容」「継続性」を主張する「古代末期」研究は、ローマ帝国の「衰退」「没落」を拒否しつつ、広大な地理的・時代的範囲のなかで、文化史的・社会史的で、かつ多様なテーマ・観点を設定し、考察にあたっては価値判断を避けるという、固有の研究スタンスを持つ研究分野として、今や学界において、その存在が広汎に認知されるに到ったといえよう。その主要な展開の場は、賛同者・批判者双方の認めるごとく、英米学界、なかんずく現在ではアメリカ合衆国である⁶¹⁾。これに対し、「衰退」概念や「衰亡論」、また政治行政史の復権が提起されるとともに、固有のスタンスを主張する「古代末期」研究を、これまでの学説史の展開のなかに位置づけつつ理解しようとする動きが出てきた。「古代末期」研究の側も、かかる動きを踏まえた論者たちの論考を『古代末期雑誌』創刊号に掲載したことから窺知されるごとく、自覚的な対応を行なおうとしている。「古代末期」研究の学問領域としての評価は依然流動的ではあるが、1971年から2009年に到るまでの英米学界を中心としたその歩みと現状は、以上のようにまとめることができるであろう。

第3章 「古代末期」研究発展の理由と問題点

さて、これまでの概観によって、「古代末期」研究のたどってきた道程と研究分野としての特徴、また、その賛同者と批判者たちの各々の見解の一致点・相違点を概ね示すことができたと思う。しかしながら、私見では、「古代末期」概念がかくまで大きな影響力を持つに到った本質的な要因は何か、依然として明瞭にされてはいないように思われる。確かに Cameron は、前章でみたごとく「古代末期」研究拡大の具体的理由を述べてはいるが、「古

代末期」研究が、その固有の研究スタンスに対して厳しい批判を受けながらも、同時に極めて急速に拡大している理由は、Cameron が強調するごとく、研究遂行上の利点や、それが20世紀後半という時代によく適合する考え方であるからという以上に、概念そのものの内在的特質による部分が大きいのではないかと考えられるからである。本章では、先のCameronの理解を踏まえた上で、「古代末期」概念の根幹にある特質を、従来からの分析カテゴリとの関係を考慮に入れつつ、より一般化して示すべく試みたい。加えて、今後の「古代末期」研究の課題についても若干の展望を示しておきたいと思う。

さて、「古代末期」概念の特質として第一に気づくことは、それが当該時代について、これまでに提示されたいかなる時代把握のタームとも異なり、極めて包括的なそれであるということであろう。すなわち、「後期ローマ帝国史」「初期ビザンツ帝国史」「西欧初期中世史」といったごとき従来のカテゴリを、おしなべて「古代末期」のもとに集約するという包括性である。それは既にみたごとく、時代的な広さのみならず、地理的な意味においても、また研究テーマや研究手法の点でも同様である。2世紀から8世紀まで、西はイベリア半島から東はイランまで、また、社会・文化・宗教はもとより、政治や行政も——軽視されてはいても——考察対象として必ずしも排除されていないから、多様な対象と方法を設定することが可能である⁶²⁾。ここから、「古代末期」研究の第二の特質として、その開放性を指摘することができよう。「古代末期」の名のもとに概括された研究成果は、従来の相対的に狭隘なカテゴリの枠内に押し込められることなく、時代的にも地理的にもテーマ・方法的にも、広い視野のもとで検討可能となる。それは昨今の学問世界における学際志向ともよく合致するのであり、かかる包括的・開放的な性格が、「古代末期」研究の量的拡大に極めて大きな貢献をなしたと考えてよいであろう。

次いで、「古代末期」の第三の特質と考えられるのは、その時代理解の概念としての中立性である。すなわち、「後期ローマ帝国史」はいわゆる「古典古代の終焉期」として、「初期ビザンツ帝国史」は啓蒙主義的な「長い衰退の歴史」の始まりとして⁶³⁾、「西欧初期中世史」はゲルマン民族研究を筆頭にナショナリズムの色彩を帯びた研究分野として⁶⁴⁾、一般に当該時代を研究する際の従来のカテゴリは、いずれも過去の研究史上において否応なく特定の価値観（多くは否定的な評価）と結び付けられ、それゆえに如上の領域の各々において、かかる価値観を払拭すべく苦心が重ねられてきたことについては贅言を要しまい。他方、現在社年期にある「古代末期」研究は、20世紀後半的な色調や種々の批判はあるにせよ、伝統的なカテゴリに不可避に随伴するネガティブな雰囲気とはまだ無縁であるといってよく、また「衰亡」「没落」ではなく「変容」「継続」を重視していることとも相俟ち、新しい学問分野として相対的に高い中立性を保っているようにみえる。それは、「古代末期」という、特定の国家や地域と結びつかない、より抽象的な時間概念を用語として採用していることも一因であろう。

以上を要するに、この「古代末期」概念の包括性・開放性・中立性という三つの特質が、

その根幹をなす特質であり、かつまた、1970年代以降の「古代末期」研究の隆盛を可能ならしめた最も重要な要因と考えてよいのではないかと思う。そして、かかる包括性・開放性・中立性のゆえに「古代末期」研究は、新たな可能性を模索しうる理想的な研究分野として、多数の支持者を集めたのではなからうか。特に、しばしば大胆な題材や分析手法を探求せんとする若手研究者にとって、多様な対象・手法が容認される研究分野の存在は、伝統的な分野のなかでは果たしえない考察を可能とする得難い場と認識されたに相違なからう。かかる場のおかげで、我々は例えば、かつては空虚な修辞の羅列でしかなかった頌詩 (panegyricus) を、政治的・社会的コンテクストのなかで有意義な史料として理解しうるようになったし⁶⁵⁾、「古代末期」の社会のなかでの女性の位置づけについて、特にキリスト教との関わりの点から知ることができるようになった⁶⁶⁾。かかる僅かな例に徴する限りでも、「古代末期」研究によって生み出された成果が、その実証的側面における価値と意義とを十分に評価されるべきものであることは明らかである。

しかしながら、かく「古代末期」研究が理想的な研究の場であり、またその成果の実証的側面を優れたものと評価するとしても、「古代末期」を、従来の分析カテゴリと直ちに置換しうる新しい概念だと考えることは、依然として困難であるといわねばならないと思う。例えば、Giardinaが提起したごとき時代区分の問題は、「古代末期」研究が時間概念を名称として利用する以上、今後も不可避に突きつけられる難題に相違あるまい。また、我が国では、「古代末期」は、元来「元首政」に対置されるべき概念である「専制君主政」の代替物とはなりえないとの批判がなされ⁶⁷⁾、政治史・行政史に立脚する伝統的立場と、社会史・文化史を中心とする「古代末期」研究とは考察次元がそもそも異なることについて、筆者自身、かねてより違和感があった⁶⁸⁾。しかし、ここでは先述したごとく、「古代末期」概念そのものに内在する問題について考えてみたいと思う。

まず、包括性・開放性についてみれば、「古代末期」が包括的・開放的であればあるほど、それが便利なターム以上のものではなくなってしまうという傾向がなくはないであろうか。先にBrownやCameronの理解によってみたごとく、「古代末期」研究は元来極めて独特の研究スタンスを強く主張してきた研究分野である。しかし、書名において「古代末期」を標榜する個別研究が激増しているにも関わらず、それらの書物の全てにおいて、Brownらが表明した研究スタンスが共有されているとはいえないのが現状であろう。かかる書物を、我々はしばしばタイトルのみから「古代末期」研究だと考えてしまいたくなる衝動に駆られるが、実際には、従来のカテゴリをただ「古代末期」に置き換えただけに過ぎないものも少なくないと思われるのである⁶⁹⁾。

このことは従って、従来個々の分野に区分されていた研究成果が、総じて「古代末期」のそれとなしうることを意味するわけであるから、結果として業績の量的増大は必然であって、その限りでは「古代末期」研究の「隆盛」とはいつても、いくらか割り引いて考える必要はあろう⁷⁰⁾。それは例えば、D. MartinとP. Cox Millarが、「古代末期」研究は、古典学

者・教会史家・ローマ史家・教父学者たちが各々「古代末期」史家を自称しているため、相対的には一体性に乏しい学問分野だと述べ、また『古代末期雑誌』編集長の R. Mathisen も、かつては後期ローマ・初期ビザンツ・初期中世・後期ラテン文学・教父学の研究者を自称していた学者が、今や皆「古代末期」研究者と自認し、「古代末期」は学問分野として独特のアイデンティティを持つ、と述べていることから窺知されるごとくである⁷¹⁾。

かかる状況のなかでは、Brown らによって彫琢されてきた「古代末期」の概念としての鋭さは鈍り、かえって単に広い時代・地理範囲の指標として、便宜的にしか機能していないことの方が多くのように思われる。歴史理解の概念が有名となり一般化するに従い、その理解について研究者間の共通理解が得られにくくなるという現象は、夙に我々が「ヘレニズム」概念によって経験したところであるが⁷²⁾、「古代末期」研究についても同様の現象が起りつつあるのではなからうか。固有の意味における「古代末期」概念の鋭い時代析出機能が、学界が活況を呈すれば呈するほど、かえって徐々に失われていっていることは、その包括性・開放性の孕む負の側面として理解されるべきではなからうか⁷³⁾。

次いで問題となるのは中立性である。確かに、極論すれば「どのような用語もあらゆる立場性を超越して厳正中立であることはできない⁷⁴⁾」。しかしながら、「古代末期」研究は、価値判断を拒絶するという立場を自ら強調し、そのゆえに時代の思潮に合致した概念として少なからぬ支持を集めながらも、実際には「古代末期」概念それ自体の内に、極めて強烈な価値判断が含まれているという事実が看過されてはならない。それというのも、「衰退」は価値判断を含むがゆえに排除されるべきだと「古代末期」研究の立場それ自体も、ひとつの価値判断の表明にほかならないからである。「衰退」を「メロドラマ」だと言い切る姿勢が、価値判断でないならば何であろうか。否定的評価も積極的評価も等しく価値判断である以上、価値判断であるということを理由に、いずれか片方だけが特に排除されねばならない理由などどこにもないはずである。従って、「古代末期」研究の中立性は、文字通りの中立性ではなく、見かけ上の中立性だといわねばならない。

それゆえ、「古代末期」研究の価値判断の拒絶そのものは、中立的立場の表明として一見正当な意見のようでありながら、結局は自家撞着の陥穽を免れていないのである。無論、研究の草創期において、かかる撞着は、当該時代に対する頑強な否定的評価を払拭し、その研究の意義を広く知らしめるために、一度は陥らねばならなかった陥穽であろう。しかし、既に「古代末期」研究が一定の成熟を経た現在において、なおかかる撞着を弥縫せんとする Cameron の次の言葉は、「古代末期」研究に固有の立場を主張するためには、歴史家個人の根本的な歴史観にまで立ち返らざるをえないという現状を示して興味深いものがある。すなわち、Cameron は次のように述べる。

私たちが書く歴史の型 (type) というものは、自らがそのなかに存するコンテクストに——それによって条件づけられているというのではないけれども、確かに——密接に結

びについてということについて論じてきました。いまして話しを進めて、私たちが何を書くか、どう書くかを決めるのはまさしく、私たち自らの主観性だといいたと思います。こういってよければ、「育ち」より「生まれ」なのです。歴史家の眼目が客観性にあると信じてきた人には、歴史が歴史家の個性 (personality) によって決められるという考え方はショッキングかも知れません。しかし、いまだき歴史が科学だという考えを擁護するなど、常軌を逸しています⁷⁵⁾。

さて、このようにみえてくると、現在の「古代末期」研究が、その成熟の裏で、ひとつの曲がり角に差し掛かっていることは間違いないように思われる。では、次なる動向は、どのような方向に進もうとしているのであろうか。歴史学の徒は未来について語るべきではなからうが、あえてこの問題を考えようとするならば、第1章末尾で記した、「古代末期」研究が中世史の視点から生み出されたものであること、そしてその特殊イギリス的性格とが問題となるのではなからうか。すなわち、この二点を相対化することによって、「古代末期」研究を孤立した学問分野にとどめることなく、その実証的成果を従来の分析カテゴリーのそれと照らし合わせ、各領域間に有機的連関を打ち立てることが可能となるのではなからうか。その際、重要な触媒の役割を果たしてくれると期待されるのは、ひとつはヨーロッパ科学財団 (The European Science Foundation) によるプロジェクト「ローマ世界の変容」(The Transformation of the Roman World, 1993-1998年) であり、もうひとつはビザンツ史であろう。本章の最後に、展望として簡単に触れておきたい。

まずひとつめの「ローマ世界の変容」プロジェクトは、EU統合を背景として、「ローマ帝国から初期中世への移行期 (4-8世紀)」を扱い、「ヨーロッパの起源とヨーロッパ諸国 (European Nations) の出現を、古代世界の終焉という岐路まで遡って研究」するものであって、歴史家だけではなく、考古学者・言語学者・貨幣学者などを含めた共同研究の試みである⁷⁶⁾。このプロジェクトの報告書は、「ローマ世界の変容」シリーズとして、オランダ・Brill社から論文集のかたちで刊行されているが⁷⁷⁾、論じられるテーマは大半が西欧中世史に関わるもので、量的にも膨大なため全体像の把握は容易でなく、中世史の専門家によるしかるべき動向分析を俟たねばならない⁷⁸⁾。但し、「古代末期」研究の主たる担い手である英米の研究者たちが、多文化主義的な観点から自らの興味関心を満たすために研究するのに対し、この「ローマ世界の変容」プロジェクトは、Gibbon以来 (より直接的には Pirenne 以来) 連綿と受け継がれてきた「ヨーロッパの形成」という問題について研究するものであって、考察対象とされる時代や地域は「古代末期」研究に重なる部分があるものの、力点は自ずとローマ帝国西部に置かれており、しかもプロジェクト全体としては、何らかの特定の観点を強制するものではない、という特徴がある⁷⁹⁾。

このことはとりもなおさず、「古代末期」研究の発展期と時を同じくして発足しつつも、基礎的な問題意識を異にするプロジェクトによって、ほぼ同一の時代が対象とされ、多様な

テーマを多様な観点・手法でもって考察した研究成果が次々と生み出されたということの意味する。しかも、このプロジェクト推進の中心的役割を果たしていたのは、古代史研究者というよりも主として中世史研究者であった。従って、「ローマ世界の変容」プロジェクトの成果は、中世史の立場をひとつの起点とした「古代末期」研究と同一レベルで捉えうる可能性があるばかりでなく、特定の観点到縛られてはおらず、また参加者の構成が全ヨーロッパに及ぶという点で、「古代末期」研究の成果を相対化してくれると期待されるのである。

この「ローマ世界の変容」プロジェクトは、主としてローマ帝国西部に関するものであるが、帝国東部について同じ役割を果たしてくれるのが、ビザンツ史であろう。確かに、「ローマ世界の変容」プロジェクトにも、ビザンツ史家は参加してはいるが、そもそもビザンツ史そのものが本来的に多国籍的性格の強い学問であるから、その意味では、先のプロジェクト以上に、「古代末期」研究の特殊英米的性格の相対化にとって好適な学問領域であるといえよう。特に、「古代末期」研究が対象とする3世紀から8世紀は、ビザンツ史では概ね「初期ビザンツ」に該当する時期であり、Brown以後の研究が考察の中心としたのも、のちにビザンツ帝国となるローマ帝国東部である以上、ビザンツ史研究が「古代末期」研究に対してどのように反応するかは、重要な意義を持つはずだと考えられるのである。

しかし残念ながら、最近のビザンツ史のなかで、「古代末期」研究は、さほど大きな注意を引いているとはいえないようである。ビザンツ史もまた「古代末期」研究と同様に、1970年代以降目覚ましい進展を示してきたが、そのひとつの総括ともいうべく、2008年に相次いで刊行された『オクスフォード・ビザンツ研究ハンドブック』や『ケンブリッジ・ビザンツ帝国史』において、Brownらによる「古代末期」研究の議論は、ビザンツ史に関する問題を広い観点から捉えようとする研究として紹介されてはいるけれども、ごく簡潔な言及にとどまっている⁸⁰⁾。また件のCameronは、最新の単著『ビザンツ人』(2006年)⁸¹⁾において、古典古代からビザンツ史への移行の問題は「古代末期」概念によって曖昧にされている、と指摘するが、結局はコンスタンティノープル市の創建を画期とするビザンツ史の伝統的時代区分を採用している。確かにCameronはビザンツ史家としてスタートしたが、同時に「古代末期」研究の牽引者のひとりでもあるだけに、「古代末期」概念の有効性やその研究成果を、ビザンツ史の観点から捉え直したときにどのようなことがいえるか、今一步踏み込んだ説明が望まれるところであったろう。

いずれにしても、「古代末期」研究は、古代史のみならず、中世史・ビザンツ史にとっても無視しえない研究分野である。それゆえ、今後、「古代末期」研究の成果は、各々の領域の論者たちによる共同作業によって、総合的に検討される必要があろう。

おわりに

いうまでもなく、ある仮説が「通説」としての位置を占めるためには、学説淘汰のプロセ

スを経なければならぬ。様々な仮説が提示されては論破され、互いに補い合い、また彫琢されていくなかで、やがて単なる問題提起にとどまらぬ、高い論理性と説得力、さらには学説としての魅力とを備えた仮説が、「通説」として生き残ってゆくはずである。これまで本稿でその発展の過程と問題点を追ってきた1970年代以降の「古代末期」概念は、果たしてそのような仮説なのであろうか。このことを見極めるためには、無論、いままの時間の経過と、そして「古代末期」研究の可能性と限界を認識すべく、傍観や無条件の賛意ではない、我々の自覚的な対応とが必要であろう。本稿は、かかる認識に基づく自覚的な対応の試みを意図したものであるが、近年の急速な研究の深化は予断を許さず、その限りで本稿も暫定的な整理に過ぎない。今後も学界の動向を刮目して見守り、機会を得て書き改めてゆきたいと思う。なお、学説の展開を叙するにあたり、個々の論者たちの主張の細かなニュアンスを犠牲にせざるをえなかった部分が少なくなく、また本文や註で言及した研究成果の評価については誤解を免れなかった箇所、取り上げるべき文献を不注意から逸している場合もある。関係の方々からのご教示をいただければ幸いである。

註

- 1) 1981年の刊行開始以来、2009年9月までに44冊のモノグラフが刊行されている。
- 2) この学会の概要と各大会のテーマについては、足立広明「シフティング・フロンティアーズ VII」『古代史年報』6、2008年、53-65頁が、第7回参加記とともに簡単に紹介している。各大会の報告書については以下の通り（2009年9月現在で刊行済みのもの）。
 - 第1回（1995年、カンサス大学）：R. Mathisen & H. Sivan eds., *Shifting Frontiers in Late Antiquity*, Aldershot, 1996.
 - 第2回（1997年、サウスカロライナ大学）：R. Mathisen ed., *Law, Society, and Authority in Late Antiquity*, Oxford, 2001. またこれとは別に、L. Hall ed., *Confrontation in Late Antiquity*, Cambridge, 2003.
 - 第3回（1999年、エモリー大学）：T. Burns & J. Eadie eds., *Urban Centers and Rural Contexts in Late Antiquity*, Michigan, 2001.
 - 第4回（2001年、サンフランシスコ州立大学）：L. Ellis & F. Kidner eds., *Travel, Communication and Geography in Late Antiquity*, Aldershot, 2004.
 - 第5回（2003年、カリフォルニア大学）：H. Drake ed., *Violence in Late Antiquity*, Aldershot, 2006.
 なお、第7回（2007年、コロラド大学）の報告書は、A. Cain & N. Lenski eds., *The Power of Religion in Late Antiquity*, Aldershot, 2009として近刊。第6回「ローマ人・蛮族・ローマ世界の変容」（2005年、イリノイ大学）の報告書は未刊と思われる。第8回「古代末期における文化的境界の変動」（2009年）は、インディアナ大学で開催された。
- 3) 註釈書としては、オランダの研究者P. de Jongeによって刊行が始まり、現在も続刊中である4世紀の歴史家アンミアヌス・マルケリヌス『歴史』（*Res Gestae*）のそれが特に注目に値しよう。P. de Jonge, *Sprachlicher und Historischer Kommentar zu Ammianus Marcellinus XIV*, Groningen, 1972. P. de Jonge, *Philological and Historical Commentary on Ammianus Marcellinus XV-XIX*, Groningen, 1972-1982. J. den Boeft et al., *Philological and Historical Commentary on Ammianus Marcellinus XX-XXIII*, Groningen, 1987-1998; XXIV-, Leiden & Boston, 2002-. この註釈書編纂事業に関連する論文集として、J. den Boeft et al. eds., *Ammianus after Julian*, Leiden & Boston, 2007が刊行された。また、アンミアヌス関連の最新の注目すべき研究として、間テクスト性の観点から『歴史』を読み解くG. Kelly, *Ammianus Marcellinus*, Cambridge, 2008がある。史料英訳としては、古代・中世史（300-800年）の

史料を主たる対象とするリヴァプール大学出版局の Translated Texts for Historians のシリーズが代表的なものである。

- 4) 史料集としては例えば、M. Maas ed., *Readings in Late Antiquity*, London & New York, 2000 や、A. Lee ed., *Pagans and Christians in Late Antiquity*, London & New York, 2000 など。著作家の概説としては、既にオーストラリアの歴史家を中心に B. Croke & A. Emmett eds., *History and Historians in Late Antiquity*, Sydney, 1983 があったが、近年 D. Rohrbacher, *The Historians in Late Antiquity*, London & New York, 2002 及び G. Marasco ed., *Greek and Roman Historiography in Late Antiquity*, Leiden & Boston, 2003 が相次いで刊行された。また、W. Treadgold, *The Early Byzantine Historians*, Basingstoke, 2007 は、著者のビザンツ歴史叙述三部作の第一作目であり、4世紀から8世紀までを「初期ビザンツ」として扱う。
- 5) P. Rousseau ed., *A Companion to Late Antiquity*, Oxford, 2009. また、ケンブリッジ大学出版局からは、それぞれコンスタンティヌスとユスティニアヌスの時代を扱った N. Lenski ed., *The Cambridge Companion to the Age of Constantine*, Cambridge, 2006 及び M. Maas ed., *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge, 2005 が出版された。後者は70歳の誕生日を祝って P. Brown に献呈されている。
- 6) A. Marcone, A Long Late Antiquity?, *JLA* 1, 2008, pp.4-19. E. James, The Rise and Function of the Concept "Late Antiquity", *JLA* 1, 2008, pp.20-30. C. Ando, Decline, Fall, and Transformation, *JLA* 1, 2008, pp.31-60.
- 7) 南雲泰輔「ローマ帝国の『衰亡』に何をみるか」『西洋史学』234, 2009年(近刊)。
- 8) P. Brown, *The World of Late Antiquity*, London, 1971.
- 9) E. ギボン(中野好夫ほか訳)『ローマ帝国衰亡史』ちくま学芸文庫, 1995-1996年。M. ロストフツェフ(坂口明訳)『ローマ帝国社会経済史』東洋経済新報社, 2001年。
- 10) E.R. ドッズ(井谷嘉男訳)『不安の時代における異教とキリスト教』日本基督教団出版局, 1981年。
- 11) J. Percival, Review of Brown (1971), *JRS* 62, 1972, pp.175-176.
- 12) P. Brown, The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity, *JRS* 61, 1971, pp.80-101. この論文が扱うのが「聖なる者」(Holy Man)であり、「聖人」(saint)でないことには注意を要する。Av. Cameron, On Defining the Holy Man, J. Howard-Johnston & P. Hayward eds., *The Cult of Saints in Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Oxford, 1999, pp.27-43 を参照。
- 13) Brown のキリスト教関連の業績のなかでも、既に「古典」となった P. ブラウン(出村和彦訳)『アウグスティヌス伝』教文館, 2004年のほか、P. Brown, *Body and Society*, New York, 1988 と P. Brown, *The Rise of Western Christendom*, 2nd ed., Oxford, 2003 は特に重要である。後者は、J. ル=ゴフ監修「ヨーロッパの形成」(The Making of Europe) シリーズの一冊。
- 14) A. Murray, Peter Brown and the Shadow of Constantine, *JRS* 73, 1983, pp.191-203. かかる Brown の姿勢に影響を受けた我が国の研究として、長谷川宜之『ローマ帝国とアウグスティヌス』東北大学出版会, 2009年。
- 15) S. Elm, Introduction, *J ECS* 6, 1998, pp.343-351.
- 16) Brown の経歴や業績全体について簡略には、P. ブラウン(後藤篤子編)『古代から中世へ』山川出版社, 2006年, 5-24頁。P. ブラウン(足立広明訳)『古代末期の形成』慶應義塾大学出版会, 2006年, 231-245頁。
- 17) G.W. Bowersock, *Augustus and the Greek World*, Oxford, 1965. G.W. Bowersock, *Greek Sophists in the Roman Empire*, Oxford, 1969. 南川高志「ローマ帝国とギリシア文化」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社, 1993年, 77-108頁。桑山由文「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」『史窓』65, 2008年, 19-32頁。
- 18) G.W. パワーソック(新田一郎訳)『背教者ユリアヌス』思索社, 1986年。
- 19) G.W. Bowersock, *Hellenism in Late Antiquity*, Ann Arbor, 1990. Bowersock の学問的業績については、彼のプリンストン高等研究所退職記念献呈論文集に収められた A. Schiavone, "Only Connect", T. Brennan & H. Flower, *East & West*, Cambridge MA & London, 2008, pp.1-11 が詳しい。Bowersock

- の主要業績としては前掲諸文献のほか、史実とフィクションの問題を扱った *Fiction as History*, Berkeley, Los Angeles, London, 1994, 初期キリスト教において殉教者が生まれる歴史的文脈を探った *Martyrdom and Rome*, Cambridge, 1995, モザイク画を「歴史文書」(historical document)として読み解く *Mosaics as History*, Cambridge MA & London, 2006, またローマ帝国東部に関する研究として, *Roman Arabia*, Cambridge MA, 1983 及び論文集 *Studies on the Eastern Roman Empire*, Goldbach, 1994 がある。
- 20) Av. Cameron, *Procopius and the Sixth Century*, London, 1985. Av. Cameron & S. Hall eds., *Eusebius. Life of Constantine*, Oxford, 1999. 後者については、エウゼビオス(秦剛平訳)『コンスタンティヌスの生涯』京都大学学術出版会、2004年の「解説」も参照のこと。
- 21) Av. Cameron, *Christianity and the Rhetoric of Empire*, Berkeley, Los Angeles, London, 1991. Cameronの学問的業績については、彼女への献呈論文集に収められた P. Brown, *To Make Byzantium Interesting*, H. Amirav & B. Romeny eds., *From Rome to Constantinople*, Leuven, Paris, Dudley MA, 2007, pp.1-9を参照。Brownは、彼女を「我らが Rostovtzeff」と評する。
- 22) ブラウン(足立訳)(2006年)29-30頁。
- 23) このBrownの批判の言葉については、我が国でも夙に注目されてきた。足立広明「聖人と古代末期の社会変動」『西洋史学』149, 1988年, 46-60頁の紹介を参照。
- 24) E. Patlagean, *Pauvreté économique et pauvreté sociale à Byzance, 4^e-7^e siècles*, Paris, 1977. 本書については、大月康弘氏による紹介(『地中海論集』12, 1989年, 87-94頁)も参照。関連する研究として、大月康弘「初期ビザンツ帝国の社会構造と慈善事業」『一橋論叢』102-6, 1989年, 922-942頁。大月康弘『帝国と慈善 ビザンツ』創文社, 2005年。長谷川香織「『聖小メラニア伝』における「求貧」モチーフ」『立命館文学』565, 2000年, 52-78頁。
- 25) Av. Cameron, *Late Antiquity- The Total View*, P&P 88, 1980, pp.129-135.
- 26) F. Clover & R. Humphreys, *Toward a Definition of Late Antiquity*, F. Clover & R. Humphreys eds., *Tradition and Innovation in Late Antiquity*, Wisconsin, 1989, pp.3-19. Clover と Humphreys は、本論文において Brown の著作を一切引用していないが、彼から助言を受けたことが序文に記されている(p.xv)。
- 27) A. ローグ(井面信行訳)『末期ローマの美術工芸』中央公論美術出版, 2007年。
- 28) H. ビレンヌ(増田四郎監修)『ヨーロッパの誕生』創文社, 1960年など。
- 29) G.W. Bowersock, *The Dissolution of Roman Empire*, G.W. Bowersock, *Selected Papers on Late Antiquity*, Bari, 2000, pp.175-185. (初出は, N. Yoffee & G. Cowgill eds., *The Collapse of Ancient States and Civilizations*, Tucson, 1988, pp.165-175.)
- 30) G.W. Bowersock, *The Vanishing Paradigm of the Fall of Rome*, Bowersock (2000) pp.187-197. (初出は, *Bulletin of the American Academy of Arts and Sciences* 49-8, 1996, pp.29-43.)
- 31) Av. Cameron, *The Later Roman Empire*, Cambridge MA, 1993, p.193. Av. Cameron, *The Mediterranean World in Late Antiquity*, London & New York, 1993, pp.7-8.
- 32) ちなみに、「古典古代の遺産の変容」シリーズのうち、唯一「古代末期」研究の基本姿勢とは異なり、ローマ帝国の政治的破局を中心テーマとするのは N. Lenski, *Failure of Empire*, Berkeley, Los Angeles, London, 2002であるが、そのことについて、Lenskiはエピローグで釈明せねばならなかった(pp.369-373.)。
- 33) P. Brown et al., *The World of Late Antiquity Revisited*, *Symbolae Osloenses* 72, 1997, pp.5-90.
- 34) F. ブローデル(浜名優美訳)『地中海』藤原書店, 2004年。
- 35) P. Brown, *Power and Persuasion in Late Antiquity*, Wisconsin, 1992.
- 36) PirenneのBrownに対する影響については、ブラウン(後藤編)(2006年)71-94頁。
- 37) Brownと Foucaultの関係については、Av. Cameron, *Redrawing the Map*, *JRS* 76, 1986, pp.266-271も参照。
- 38) Brown et al. (1997) p.27.
- 39) P. Brown, *The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity*, 1971-1997, *JECS* 6, 1998, pp.353-376. 同様に「台頭と機能」刊行25周年を記念した論文集 Howard-Johnston & Hayward (1999)は、

- 聖人伝史料における表象と社会的現実との相互作用をテーマとする。
- 40) Av. Cameron, *The Perception of Crisis, Morfologie sociali e culturali in europa fra trada antichità e alto medioevo: 3-9 aprile 1997*, Spoleto, 1998, Tom. 1, pp.9-31.
- 41) J.H.W.G. Liebeschuetz et al., *The Use and Abuses of the Concept of 'Decline' in the Later Roman History*, L. Lavan ed., *Recent Research in Late-Antique Urbanism*, Portsmouth, 2001, pp.233-245. なお、本書巻頭の L. Lavan, *The Late-Antique City: A Bibliographical Essay*, Lavan (2001) pp.9-26 は、当該時代の都市に関する研究史の整理として大変有益である。
- 42) J.H.W.G. Liebeschuetz, A.H.M. Jones and the Later Roman Empire, J.H.W.G. Liebeschuetz, *Decline and Change in Late Antiquity*, Aldershot, 2006, XVI. Bowersock や Cameron らと同様、Liebeschuetz も広い問題関心を持つが、考察手法としてはオーソドクスなものが多い。初期の業績である *Antioch*, Oxford, 1972 は、浩瀚な G. Downey, *A History of Antioch in Syria*, Princeton, 1961 以後のアンティオキア都市史研究のなかで、社会史的研究として重要なもののひとつ。宗教関係では、宗教と政治状況との関わりを共和政後期から帝政後期まで通覧した *Continuity and Change in Roman Religion*, Oxford, 1979 が、「蛮族」関係では、4世紀末から5世紀初頭にかけてのローマ軍の「蛮族」化と帝国のキリスト教化の問題を、「蛮族」の武人たちや司教ヨハネス・クリュソストモスらに注目しつつ考察した *Barbarians and Bishops*, Oxford, 1991 がある。その他、1960年代以来、彼が政治・行政・宗教・「蛮族」・歴史叙述の各々の分野で公刊した数々の論考は、*From Diocletian to the Arab Conquest*, Aldershot, 1990 及び *Decline and Change in Late Antiquity*, Aldershot, 2006 の二冊の variorum に収められており、またミラノ司教アンブロシウスの著作の翻訳も手掛けている (*Ambrose of Milan, Political Letters and Speeches*, Liverpool, 2005)。最新の単著は、Lavan (2001) でも話題となった *Decline and Fall of the Roman City*, Oxford, 2001 で、その書名からも察せられる通り、「根本的に保守的な声明」(R. Alston, Review of Liebeschuetz (2001), *JRS* 93, 2003, pp.406-407) と評された。本書については、松本宣郎氏による書評 (*『西洋古典学研究』* 51, 2003年, 156-159頁) も参照。
- 43) G.W. Bowersock, P. Brown, O. Grabar eds., *Late Antiquity*, Cambridge MA & London, 1999. 但し、編者たちは、本書は「あくまでもガイドであって、百科事典 (encyclopedia) でも事典 (dictionary) でも辞書 (lexicon) でもない」とする。
- 44) A. Bowman, P. Gansey & Av. Cameron eds., *The Cambridge Ancient History*, vol.12, *The Crisis of Empire, A.D.193-337*, Cambridge, 2005. Av. Cameron & P. Garnsey eds., *The Cambridge Ancient History*, vol.13, *The Later Empire, A.D. 337-425*, Cambridge, 1998. Av. Cameron, B. Ward-Perkins & M. Whitby eds., *The Cambridge Ancient History*, vol.14, *Late Antiquity, Empire and Successors, A.D.425-600*, Cambridge, 2000. 第12巻については、松本宣郎・井上文則・田中創の各氏による書評 (*『西洋古典学研究』* 55, 2007年, 154-158頁) も参照。
- 45) S. Mitchell & C. Katsari, Introduction, S. Mitchell & C. Katsari eds., *Patterns in the Economy of Roman Asia Minor*, Swansea, 2005, pp.xiii-xxxii, esp. p.xvi. 他に新マルクス主義の影響を受けた注目すべき研究として、A. Schiavone, *The End of the Past*, Cambridge MA & London, 2000. なお本書は、「古代を暴く」シリーズの一冊 (原著はイタリア語, 1996年刊)。
- 46) A. Giardina, *Esplosione di tardoantico*, *StudStor* 40, 1999, pp.157-180.
- 47) この論文に対しては、のちに Bowersock が、いかなる時代区分も客観的ではなく、それは常に解釈として存するものだと反論を行なっている。G.W. Bowersock, *Riflessioni sulla periodizzazione dopo <Esplosione di tardoantico> di Andrea Giardina*, *StudStor* 45, 2004, pp.7-13. また、D. Vera, L. Cracco Ruggini, E. Fentress, A. Schiavone, C. Lepelley, G.W. Bowersock, *Antico e tardoantico oggi*, *RSI* 114, 2002, pp.349-379, esp. pp.376-379 及び G.W. Bowersock, *Centrifugal Force in Late Antique Historiography*, C. Straw & R. Lim eds., *The Past Before Us*, Turnhout, 2004, pp.19-23 も参照。Bowersock の反論に対する Giardina の反応は、A. Giardina, *Tardoantico*, *StudStor* 45, 2004, pp.41-46.
- 48) J.H.W.G. Liebeschuetz, *Late Antiquity, the Rejection of "Decline", and Multiculturalism*, Liebeschuetz (2006) XVII.
- 49) Av. Cameron, *The 'Long' Late Antiquity*, T. Wiseman ed., *Classics in Progress*, Oxford, 2002, pp.165-191.

- 50) A.H.M. Jones, *The Later Roman Empire*, Oxford, 1964.
- 51) E. サイド (板垣雄三ほか訳) 『オリエンタリズム』 平凡社, 1993年。
- 52) J.H.W.G. Liebeschuetz, *The Birth of Late Antiquity*, Liebeschuetz (2006) XV. (初出: 2004年) この論文のなかで Liebeschuetz が、「古代末期」研究の拡大には、J.F. Matthews のオクスフォード大学での博士論文指導が重要な役割を果たしていたと指摘していること (p.12, note 48) も看過しえない。ちなみに、Matthews の近著 *The Journey of Theophanes*, New Haven, 2006 は、2007年のプレステッド賞を受賞している。
- 53) O. シュベングレー (村松正俊訳) 『西洋の没落』 五月書房, 1989年。
- 54) H.-I. マルー (岩村清太訳) 『アウグスティヌスと古代教養の終焉』 知泉書館, 2008年。
- 55) Av. Cameron, *History and the Individuality of the Historian*, Straw & Lim (2004) pp.69-77.
- 56) これ以後の Cameron と Liebeschuetz の論争は、後者の師 A.H.M. Jones に関する論文集にその場を移すことになるが、「古代末期」研究そのものに関する議論からはやや離れるので、本稿ではこれ以上立ち入らない。Av. Cameron, A.H.M. Jones and the End of the Ancient World, D. Gwynn ed., *A.H.M. Jones and the Later Roman Empire*, Leiden & Boston, 2008, pp.231-249. J.H.W.G. Liebeschuetz, A.H.M. Jones and the Later Roman Empire, Gwynn (2008) pp.251-269. なお本書は、オランダ・Brill社刊の「ローマ世界の変容」シリーズ (註77) の続編「ブリル初期中世シリーズ」(Brill's Series on the Early Middle Ages) の一冊。
- 57) F. Millar, *A Greek Roman Empire*, Berkeley, Los Angeles, London, 2006, p.xiv.
- 58) 例えば, B. Ward-Perkins, *The Fall of Rome and the End of Civilization*, Oxford, 2005. P. Heather, *The Fall of the Roman Empire*, Oxford, 2006. 後者については、南川高志氏による書評(『西洋古典学研究』56, 2008年, 142-145頁)も参照。また, A. Goldsworthy, *How Rome Fell*, New Haven & London, 2009 は、在野の史家による「古代末期」研究に対する反論。この新しい「衰亡論」の動向については、別に機会を得て、筆者なりに検討を行ないたい。
- 59) 重要な論文集として、さしあたり S. Mitchell & G. Greatrex eds., *Ethnicity and Culture in Late Antiquity*, London, 2000. S. Swain & M. Edwards eds., *Approaching Late Antiquity*, Oxford, 2004. D. Martin & P. Cox Miller eds., *The Cultural Turn in Late Ancient Studies*, Durham & London, 2005. など を挙げておく。
- 60) Marcone (2008) . James (2008) . S. Rebenich, *Late Antiquity in Modern Eyes*, Rousseau (2009) pp.77-92. 無論, R. Markus, *Between Marrou and Brown*, P. Rousseau & M. Papoutsakis eds., *Transformations of Late Antiquity*, Farnham, 2009, pp.1-13 のように Brown の画期性を強調する立場も根強い。なお、本書は Brown への献呈論文集である。また、フランス学界からみた簡便な学説史整理として、B. Lançon, *L'antiquité tardive*, Paris, 1997, pp.14-18. 但し Lançon は、Cameron には言及するものの、Brown を「古代末期」の学説史のなかに位置づけてはおらず、彼の業績を専ら宗教研究の文脈でのみ参照する。
- 61) Cameron (2004) p.74.
- 62) 例えば, A. Lee, *War in Late Antiquity*, Oxford, 2007 の副題が、'A Social History' であるように、従来ならば事件史や政治史として取り上げられることが多かった「戦争」さえも、「古代末期」研究の枠内では社会史的なアプローチによって考察される。
- 63) 近代ヨーロッパがビザンツに与えたネガティブな評価について簡略には、井上浩一「ビザンツ帝国と『ヨーロッパ・アイデンティティ』」谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社, 2003年, 72-87頁。
- 64) ナショナリズム史観に対する近年の批判的研究として、P. ギアリ (鈴木道也ほか訳) 『ネーションという神話』白水社, 2008年。
- 65) 例えば, S. MacCormack, *Art and Ceremony in Late Antiquity*, Berkeley, Los Angeles, London, 1981. J. Vanderspoel, *Themistius and the Imperial Court*, Ann Arbor, 1995. かかる動向に影響を受けた我が国の研究として、西村昌洋「テミスティオスにおける『哲学』と『哲学者』」『西洋古代史研究』8, 2008年, 1-22頁。西村昌洋「テトラルキア時代ガリアにおける弁論家と皇帝」『史林』92-2, 2009年, 324-358頁。

- 66) 例えば, G. Clark, *Women in Late Antiquity*, Oxford, 1993. K. Cooper, *The Virgin and the Bride*, Cambridge MA & London, 1996.
- 67) 井上文則『軍人皇帝時代の研究』岩波書店, 2008年, 1-19頁。
- 68) 南雲泰輔(書評)「C. Kelly, *Ruling the Later Roman Empire*」『史林』90-3, 2007年, 516-524頁, 特に523頁。
- 69) 例えば, J. Maxwell, *Christianization and Communication in Late Antiquity*, Cambridge, 2006やR. Criboire, *The School of Libanius in Late Antique Antioch*, Princeton & Oxford, 2007のタイトルの「古代末期」は、「後期ローマ帝国」と置き換えてもほとんど問題ないのではあるまいか。筆者自身, かつて「古代末期」で「後期ローマ」を意味させたことがあった(南雲泰輔「ユリアヌス帝の意識のなかのローマ皇帝像」『西洋古代史研究』6, 2006年, 19-39頁)。
- 70) 従って, A. Smith, *Philosophy in Late Antiquity*, London & New York, 2004やP. Vassilopoulou & S. Clark eds., *Late Antique Epistemology*, Basingstoke, 2009のような哲学関係の著作も「古代末期」研究となるごとく, 足立(2008年)59頁が指摘する「古代末期」研究の「保守的な」色調は, 従来の学問領域をその内に取り込んだことによって起こった逆説的な現象とみなすべきではなからうか。
- 71) Martin & Miller (2005) p.1. R. Mathisen, From the Editor, *JLA* 1, 2008, p.1.
- 72) 大戸千之『ヘレニズムとオリエント』ミネルヴァ書房, 1993年, i-ii頁, 2-26頁。
- 73) 「古代末期」概念の多義化の端的な例として, 我が国では, 足立広明(2008年)53頁, 註1。ここで足立氏は, 「古代末期」とは「後期ローマ帝国」「初期ビザンツ帝国」「キリスト教ローマ帝国」よりも「広汎な概念」であり, 「批判や批判への再批判を可能とする…共通の土俵, 認識枠組」だとしているが, それがなぜほかならぬ「古代末期」でなければならないのか, 氏の説明からは分らない。また足立氏は, 「『古代末期』とは, 英語の Late Antiquity, ドイツ語の Spät Antike, フランス語の antiquité tardive などに対応する訳語である」と述べるが, 仮に日本語の訳語が同じであっても, 学説史上で各々の語に付与されてきたニュアンスは微妙に異なることには注意を要する。これについては例えば, 佐藤彰一『ポスト・ローマ期フランク史の研究』岩波書店, 2000年, 47-48頁, 註1を参照。但し, 佐藤氏も「古代末期」の概念規定を明確にしているわけではない。
- 74) 足立(2008年)53頁, 註1。
- 75) Cameron (2004) p.75.
- 76) ヨーロッパ科学財団の「ローマ世界の変容」に関するウェブページは下記の通り。 <http://www.esf.org/activities/research-networking-programmes/humanities-sch/completed-rnps-in-humanities/the-transformation-of-the-roman-world.html>。また, L. Webster & M. Brown eds., *The Transformation of the Roman World AD 400-900*, Berkeley, Los Angeles, 1997, p.7も参照。この展覧会図録は, のちに刊行される「ローマ世界の変容」プロジェクトの一連の報告書の先駆けをなすものである。
- 77) 全タイトルの一覧は以下の通り。
- 第1巻: W. Pohl ed., *Kingdoms of the Empire*, Leiden, New York, Köln, 1997.
- 第2巻: W. Pohl & H. Reimitz eds., *Strategies of Distinction*, Leiden, New York, Köln, 1998.
- 第3巻: R. Hodges & W. Bowden eds., *The Sixth Century*, Leiden, New York, Köln, 1998.
- 第4巻: G. Brogiolo & B. Ward-Perkins eds., *The Idea and Ideal of the Town between Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Leiden, New York, Köln, 1999.
- 第5巻: E. Chrysos & I. Wood eds., *East and West*, Leiden, New York, Köln, 1999.
- 第6巻: M. de Jong et al., eds., *Topographies of Power in the Early Middle Ages*, Leiden, New York, Köln, 2001.
- 第7巻: 未刊行?
- 第8巻: F. Theuvs & J. Nelson eds., *Rituals of Power from Late Antiquity to the Early Middle Ages*, Leiden, New York, Köln, 2000.
- 第9巻: G. Brogiolo et al. eds., *Towns and Their Territories between Late Antiquity and the Early Middle Ages*, Leiden, New York, Köln, 2000.
- 第10巻: W. Pohl et al. eds., *The Transformation of Frontiers from Late Antiquity to the Carolingians*, Leiden, New York, Köln, 2001.

- 第11巻：I. Hansen & C. Wickham eds., *The Long Eighth Century*, Leiden, New York, Köln, 2000.
第12巻：R. Corradini et al. eds., *The Construction of Communities in the Early Middle Ages*, Leiden, New York, Köln, 2003.
第13巻：H.-W. Goetz et al. eds., *Regna and Gentes*, Leiden, New York, Köln, 2003.
第14巻：M. Barceló & F. Sigaut eds., *The Making of Feudal Agricultures?*, Leiden, New York, Köln, 2004.

- 78) さしあたり、森本芳樹『西欧中世形成期の農村と都市』岩波書店、2005年、427-454頁。森本芳樹『西欧中世初期農村史の革新』木鐸社、2007年。R. ル・ジャン（加納修訳）『メロヴィング朝』白水社、2009年、9-10頁などを参照。
- 79) 以上のまとめについては、次の諸論文を参照。I. Wood, *The European Science Foundation's Programme on the Transformation of the Roman World and the Emergence of Early Medieval Europe*, *Early Medieval Europe* 6, 1997, pp.217-227. P. Delogu, *Transformation of the Roman World*, Chrysos & Wood (1999) pp.243-257. Liebeschuetz (2006) XVII, p.644. Camerron (1998) p.10, note 2. Cameron (2002) p.168, note 11, p.174, note 41. Cameron (2004) pp.73-74.
- 80) E. Jeffreys et al. eds., *The Oxford Handbook of Byzantine Studies*, Oxford, 2008. J. Shepard ed., *The Cambridge History of the Byzantine Empire c.500-1492*, Cambridge, 2008.
- 81) Av. Cameron, *The Byzantines*, Oxford, 2006. 著者は、「ビザンツ人」は「民族」でないと書いているが、やはり本書が「ヨーロッパの諸民族」(The Peoples of Europe) シリーズの一冊であることには意外の感を免れない。

【付記】本稿は、平成21年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。